

1. 日本語の自動詞・他動詞をめぐる議論

1. 1 統語的な指標をめぐる議論

動詞の語彙的な特性として、意味的および文法的にどのような名詞句と結びつくかということは、およそどのような言語理論においても問題にされてきたところである。中でも、自動詞・他動詞の区別については、文法理論の中核部分に関わることが多いため、これまで様々な議論がなされてきたし、ここ20年ほどの間、新しい文法的概念の提案とともに、その論議はさらに活発なものになっている。日本語をめぐるその論議については、須賀・早津（1995）に主要論文がまとめられているが、本稿では、それ以降の動きも踏まえながら日本語に関する研究の展開を概観し、それからアイヌ語における同方面の研究について、これまでの流れを略述し、展望を試みる。

Prashant Pardeshi（2000）は、他動性をめぐるアプローチ法を次のふたつに大きく分ける（p.115）。

One of them treats transitivity as a dichotomy based on the presence vs. absence of a direct object ("polar" approach), while the other understands it as a continuum along which clauses with varying degrees of transitivity – adjusted on the basis of a number of semantic parameters – can be arranged ("scalar" approach).

そしてさらに、彼は前者を syntactic transitivity と呼び、後者を semantic transitivity と呼んでいる。日本語に関する自動・他動の議論に関しても、このふたつの立場のせめぎ合いとしてとらえると、理解しやすい。

前者の syntactic transitivity に関するアプローチは、統語的な指標を用いて目的語という範疇を決定し、目的語をとるが否かで自動詞か他動詞かを二分するという考え方であるが、ある名詞句が目的語であることの指標となるものは言語によって異なる。たとえば英語であれば動詞の直後に来て前置詞を伴わないということであり、アイヌ語であれば後置詞を伴わず、かつ主格の人称接辞に対応しないということである。日本語においては、格助詞「を」をとるということが、伝統的にもな指標として用いられてきた。

しかし、「を」をとる名詞句を伴うという統語的な指標のみで、他動詞か自動詞を決定するという極端な立場をとる研究者は少ない。その代表として知られているのは松下大三郎であるが（松下：1923-24。なお、須賀・早津編：1995 の解説編 p.214-15 も参照）、多くの研究者は「を」を指標としながらも、さらに意味的な基準を加えて、自他の判定を行っている。

たとえば、岩波国語辞典第5版（1994）の「品詞概説」の項では次のように記述されている。

動詞は自動詞と他動詞とに分けられるが、国語の場合この区別は文法的なものというより意味上のものである。他動詞は動作・作用が他に影響を及ぼす意を積極的に表した動詞、自動詞はそういう意を積極的に表していない動詞である。(中略) 他動詞は助詞「を」のついた分節によって修飾され得るが、逆にそういう連用修飾語を伴えば必ず他動詞かと言うと、そうとは限らない。『山を越える』『空を飛ぶ』『席を立つ』などの『越える』『飛ぶ』『立つ』は皆、自動詞である。これらの動作の影響が他に全く及んでいないわけではないが、表現の重点がそこになく、この助詞「を」は動作の基準点・経過点を示すものであるから、これらは自動詞ということになる。『山を越える』と『山を越す』と比べてみるとよい。『越す』は他動詞である

このように、「を」の中に場所を示す用法があり、それを対象を表す「を」と区別して、目的語の指標から外すというのが、多くの研究者のとってきた立場だと考えられる。

奥津敬一郎(1967)も、「を」を目的格を表すものと、移動格を表すもののふたつに分け、その両者は文法的に弁別できるとする。そして、「目的語をとるかからないかで、動詞を自・他に分けることは、文法上有意義である、と言わねばならない」(p.60)と論じている。

しかし、「を」のうちのどれが移動格であり、どれが対象格であるかということの判断は、上記の奥津論文においてもさほど明確ではない。たとえば同論文で奥津は「例えば『通ル』と『通ス』には自・他の対応があるとされる。ところが(7) 弁慶ハ 安宅ノ関ヲ 通ツタの様に『通ル』も『ヲ』をとるので、他動詞のようにも見える」(p.59)と言う。ところが、そのすぐ後では次のように言っている。

「通ス」は他動詞と考えられるから次の文ができる。

(8) 富樫ハ 弁慶ヲ 通シタ

これは「富樫ハ ダレヲ 通シタカ」という問いに対する答えになるが、それでは「富樫ハ ドコヲ 通シタカ」という問いに対しては、

(9) 富樫ハ 安宅ノ関ヲ 通シタ

となるであろう。(8)と(9)の「弁慶ヲ」と「安宅ノ関ヲ」は共に同じく目的語なのだろうか。これを検するいくつかの構文論的方法がある。

まず後述する様に、「通ル」「通ス」の様な対応がある場合、自動詞のとり主語が、他動詞のとり目的語と一致する。つまり(7)の主語である「弁慶」が、(8)では「通ス」の目的語になっている。ところが(9)で「ヲ」をとって目的語らしく見える「安宅ノ関」は、

(10) *安宅ノ関ガ 通ル

のように自動詞の主語となることはできない。故に「安宅ノ関」は自・他どちらの場合でも「ヲ」をとって目的語以外の機能を果たしている、と見るべきであろう。

ここでは、「通る」が自動詞であるのは自明であるような説明をしている。またこの奥津の論を以てすると、

前述の岩波国語辞典の「越す」「越える」についても、「越す」が他動詞であり「越える」が自動詞であるとするならば、「山が越える」と言えるはずだが、実際にはそれは言えないので「越す」も「越える」も自動詞だという議論になるはずである。

一方、村木新次郎（1991）は、自他の区別に関して、次のようなあっさりした言明を行っている（p.33）。

自動詞と他動詞の判定は、対格名詞との共起が可能か否かによっておこなわれる。この判定をめぐって問題が生じるが、ここではその点については言及しない。

ここで「対格名詞」と言っているのは、「を」を伴っている名詞ということだと見なしてよい。そして、それを裏付けるように、その後の自他動詞の対応一覧では、「越える」と「越す」は他動詞と他動詞のペアのひとつとして挙げられている（p.41）。したがって、「を」をとるならば機械的に他動詞という判定を下しているように見えるが、一方では「通る」と「通す」は自動詞と他動詞のペアの中に数えられている（p.35）。

このように、「を」の有無を統語的な指標として用いるということには、そこに意味論的な判断が絡んでくる限り、実際の適用において様々な問題が生じる。そればかりでなく、なぜ「を」を特別視するのかということについても議論がある。たとえば、「かむ」を他動詞と見なすことには、まず異論がなからうと思われるが、同じような意味を表す「かみつく」は「を」を要求しない。では、「かみつく」は自動詞と見なされているのかというと、種々の国語辞典を見ても、かなり判断がまちまちであることがわかる。

三省堂『新明解国語辞典』第4版（他5）

講談社『日本語大辞典』第2版（五他）

岩波書店『広辞苑』第3版（他4）

岩波書店『国語辞典』第5版（自5）

学習研究社『学研国語大辞典』初版（自5）

岩波書店『広辞苑』では「かみつく」は他5となっているが、「とびつく」は自5となっている。つまり、「～にかみつく」の「に」は目的語を表す「を」と同じものとみなされ、「～にとびつく」の「に」は場所を表すものだとみなされていることになる。また、同じく「かみつく」を（他5）としている『新明解』では、「くいつく」を（自5）としているが、「かみつく」と「くいつく」の間にどのような意味的な差が考えられているのかは明らかではない。

このように「に」の一部をも目的語を判定するための指標に加えようとする、さらに判断の一致を見ることが難しくなってくる。

そこで、格助詞以外の統語的基準を用いるという考え方が出てくる。野村剛史（1982）は、自他動詞の弁別のおもな根拠と認められているものとして、次の三点を挙げる（p.141）。

- ①意味形態的に対応する自他動詞の存在
- ②受身との対応
- ③「を」格の有無

そして、②について『まともな受身』-直接受動との対応関係によって動詞の自他を（直接には他動詞を）決定する」方法と規定した上で、「日本語の自他動詞の実際的認定に関しては、自他の方法を重視する①説と、能動・受動の対応を重視する②説が併用されてしかるべきなのである」（p.144）と述べている。

直接受動文はまた、「まともな受身」「まともな受身」「直接受身文」などとも呼ばれるが、おおむね、次のように①の文が②の文に言い換え可能な場合の②の文と規定される。

- ① N_1 が N_2 を V
- ② N_2 が N_1 に V -られ

これに対して、「はた迷惑の受身」「被害の受身」「間接受身文」「第三者の受身」などと呼ばれるものは、②に対応する①を作れない。言い換えれば、対応する能動文中にガ格名詞が存在しない受身文である。

野村は直接受動文を作れる動詞を他動詞と規定するが、この規定によって二格をとる動詞の一部も他動詞となる。

- ① 犬が人にかみついた。
- ② 人が犬にかみつかれた。

このようにヲ格をとらず二格をとり、かつ他動詞と認められる動詞は、一他動詞（野村剛史）、準他動詞（杉本武）、第二種他動詞（仁田義雄）など、研究者によって様々な名付けられている。

そればかりでなく、野村は従来「場所」を表すと考えられることの多かった「を」格をとる動詞についても、上記の基準を以て他動詞と認める立場をとるとして、次のように述べている（p.145）。

本稿では通過点を表す「を」格をもつ動詞「道を歩く、山を登る、橋を渡る」のようなものは、全て他動詞と認める。これらの動詞については、次のような受身表現が今日では現実に使われ、また可能なものとして認められるからである。

歩く やはり双六小屋の荷上げ道の一部として利用されていた打込谷もようやく沢通しに歩かれるようになり、抜戸岳の登路にされつつある（『立山・剣・薬師岳』1972 山と溪谷社）

登る もとより、アルプスでの冬期登攀の歴史は古く、すでに 1930 年代から幾多の大岩壁が登られていたが・・・ 1934 年にはアイガー東山稜がルイジ・カレル一行によって登られている。（『マッターホルン北壁』小西政継 1979 中公文庫）

渡る ドーバー海峡が始めて泳いで渡られた時・・・(作例)。

この野村のような立場は、松下大三郎とは異なる指標を用いてはいるが、Pardeshi の用語で言えば、やはり syntactic transitivity を最大限に追求したアプローチ法ということになるだろう。

1. 2. 自動詞・他動詞のプロトタイプ

1. 1で挙げてきたいくつかのアプローチ法のように、たとえ複数の指標を用いるにせよ、それによって動詞を自動詞と他動詞のどちらかに二分するという考え方に対して、他動性というものを程度差としてとらえ、いわば他動性と自動性のプロトタイプというものを想定して、個々の動詞はその間のどこかの地点に位置づけられるという考え方が、一方で発展してきた。その出発点となったのが Hopper and Thompson (1980) である。彼らのアプローチは、統語論的なものばかりでなく、意味論的な基準、さらには語用論的な基準も積極的に取り込んで行って、その特徴の総体として他動詞性というものを考えていくものである。

ウェスリー・ヤコブセン (1989) は、その考え方を日本語に適用したが、その際に、他動性の意味原型 (プロトタイプ) というものを、次のように整理した。

- (a) 関与している事物 (人物) が二つある。すなわち動作主 (agent) と対象物 (object) である。
- (b) 動作主に意図性がある。
- (c) 対象物は変化を被る。
- (d) 変化は現実の時間において生じる。

また、角田太作 (1991) は、「他動性を考える際に、その意味的側面と形の側面をはっきり区別する」とした上で、次のような他動詞文と他動詞の意味的原型を立てている。

他動詞文の原型の意味的側面

参加者が二人 (動作者と動作の対象) またはそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。(動作者と対象は無生物の場合もある。従って、二人でなく、二つの場合もある)

他動詞の原型

相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞。

角田はこのような原型の設定を基に、対象に直接影響を与える動詞のうち、「殺す」「壊す」「温める」などの、対象に変化を与える動詞 (1A) と、「叩く」「蹴る」「ぶつかる」などの、変化を与えない動詞 (1B) とを区別することを始め、いわゆる他動詞を含めた「二項述語」と呼ばれるものの、普遍的な分類の枠組みを

提案した。

ヤコブセンや角田のこうしたアプローチに共通するのは、このような意味的な他動詞の原型と言う普遍的なものをまず立てた上で、統語論的あるいは形態論的な他動詞原型というものを、個々言語においてそれに対応して表れるものとして考えるという点である。

角田（1991）は、その点について、次のように述べている。

ここで提案する定義では、ある言語における他動性の原型の形の側面とは、意味的に他動詞の原型であるものがその言語で持っている文法的特徴である（p.74）。

この考え方が1. 1で述べたようなアプローチと一線を画しているのは、次のような点である。統語的な基準を第一義のものとして考えるかぎり、個別言語の統語論的あるいは形態論的構造に、当然のことながら大きく左右されるわけであり、そこで得られた結論はその当該の言語の中でしか意味を持たないことが多い。それに対して、意味を第一の基準にしたプロトタイプ的なアプローチは、最初からそれが普遍的なものであることを前提にしており、異なる言語間の対照というものを可能にするのである。

ヤコブセン（1989）は次のように述べる（p.221）。

前節で紹介した意味原型は、人間の経験に由来する普遍的なものである。従って、それがすべての自然言語において何らかの形式で文法に反映されてくるのも、極く当然のことであろう。つまり、この意味原型に相当する文法の原型がどの言語にもあるということになるが、文法形式は無論個々の言語によってまちまちである。

ヤコブセンは、その意味原型からのずれが、文法形式にどのように反映されているかを、日本語と英語を対照させる形で見て行き、日本語と英語の間の違いを非常に興味深い形でまとめている。角田（1991）が行っている二項述語の分類も、基本的には意味的な原型からのずれが、どのように形の上に反映されているかを考慮しての分類であり、ヤコブセンと同じスタンスをとっているといえる。

こうした、いわば semantic transitivity に重心を置いた研究は、言語の普遍性・類型性という問題に対する関心がますます深まる中で、形の上からのアプローチとも、色々な形で連動して行くことになる。

1. 3 自動・他動の細分化

1. 2のようなアプローチ法は当然のことながら従来の自動詞・他動詞という二分法的な区別を崩すものであるが、形態論や統語論の方からのアプローチにおいても、従来の自動詞・他動詞各々の中をさらに細分化していく考え方が生まれてきた。

早津恵美子は、早津（1989）などで「有対他動詞」と「無対他動詞」という区分を提案し、「切れる：切る」

「曲げる：曲がる」のように他動詞が形態論的な自動詞の対を持つか否かという区別が、意味論的な違いに対応しているということを、さまざまな形で示している。そのひとつの結論として、次のような違いが挙げられている。

- 有対他動詞には、働きかけの結果の状態に注目する動詞が多い。
- 無対他動詞には、働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い。

早津自身は、この区別を最初から日本語の分析を越えて普遍的な問題として考えようとしていたとは思われず、日本語独自の形態的な指標によって動詞をグルーピングし、そこからその意味的側面を探っていったものであるが、そこで導き出された有対他動詞という概念は、結果としてヤコブセンや角田が立てた他動詞の原型というものに、非常に近いものとなっている。

たとえば、角田（1991）では、前記の1Aと1Bの動詞の違いを説明するのに、

- (A) 「他目＝自主」型。他動詞文の目的語が自動詞文の主語に対応する。
- (B) 「他主＝自主」型。他動詞文の主語が自動詞文の主語に対応する。

というふたつのタイプを挙げ（p.102）、(A)の対応を示す語は1Aに属すとし、英語もこの傾向を示すとして、次のような例を挙げている（p.103）。

(A)の対応の例：

John opened the window. 'ジョンが窓を開けた。'

The window opened. '窓が開いた。'

(B)の対応の例：

John drinks beer. 'ジョンはビールを飲む。'

John drinks before meals. 'ジョンは食前に飲む。'

そして、「日本語でも1Aの他動詞のかなり多くは、(A)の対応を示す」「しかし、1Bの動詞（例、「叩く」、「ぶつ」）には対応する自動詞がない」（p.103）と述べる。これは、有対・無対という、純粋に個別言語の形態論的現象と見られそうなものが、他動詞性というものを媒介にして、自他の形態的な区別を持つことの少ない英語の統語論的な現象と結びつけることができるという例であり、そういった言語の違いを越える共通性への予想が、この有対・無対と意味との相関という早津の「発見」がその後色々なところに影響を与えて行った大きな理由である。後述するように、アイヌ語についても、佐藤（1992a）が、早津論文の成果を援用してアイヌ語の自動詞・他動詞の分析を行っている。

一方、影山太郎（1996）は、関係文法やGB理論から発展してきた非対格性と非能格性という概念を用いて、

日・英語の自動詞の対照研究を行っている。

非対格性と非能格性というのは、他動詞に対して次のような項構造を持つ自動詞の性質として規定される (p.21)

他動詞：(x<y>)

非能格自動詞：(x< >)

非対格自動詞：(<y>)

すなわち、自動詞の唯一の名詞項は表層で主語として実現するわけだが、深層においては、非能格自動詞の場合は他動詞の主語にあたる位置にあり、非対格自動詞の場合は他動詞の目的語にあたる位置にあるということである。

この構文論的な違いは、意味の違いに反映しており、影山 (1996) で紹介されている Perlmutter & Postal (1984) の分類を引用すると、次のような意味的な区分が対応しているとされる (pp.20-21)。

非能格自動詞

1) 意図的ないし意志的な行為

work, play, speak, skate, swim, dance, jump, walk, fight, cry, whisper, shout, bark, roar

2) 生理的現象

cough, sneeze, hiccough, belch, vomit, sleep

非対格自動詞

1) 形容詞ないしそれに相当する状態動詞

2) 対象物を主語に取る動詞

burn, fall, drop, sink, float, slide, slip, glide, flow, tremble, boil, darken, freeze, melt, evaporate, open, close, break, explode

3) 存在ないし出現を表す動詞

appear, happen, exist, occur, disappear, last, remain, survive

4) 五感に作用する非意図的な現象

shine, sparkle, glitter, smell, stink, jingle, click

5) アスペクト動詞

begin, start, stop, cease, continue, end

影山 (1996) は、こうした意味的差異を伴う二種の自動詞の違いが、文法的にも、名詞化構文の格表示、「名詞+動詞」型の複合語、結果構文、受身文、使役文などに現れると論じており (pp.22-33)、また、影山 (1993) では、その「名詞+動詞」型の複合語において、両者にどのような違いが出るかを、詳細に論じている。

ここで興味深いのは、この影山のとりあげている非対格動詞は、その一部が早津の言う有対自動詞に相当し、また、ヤコブセン（1989）の言う自発的意味原型（自動的意味原型）とも重なることである。ヤコブセンは自発的意味原型について、次のように定義する（p.239）。

- (a) 関与している事物（人物）が二つある。すなわち、動作主（agent）と対象物（object）である。
- (b) 対象物は変化を被る。
- (c) 変化は現実の時間において生じる。

すなわち、プロトタイプ論（ヤコブセン）、日本語の形態論的分析（早津）、生成文法をベースとした統語論（影山）という、三つの全く異なった方向からのアプローチが、自動詞を同じような形で細分化する結果になったわけであり、逆に言えば、このように細分化されたものが日本語や英語以外の諸言語でどのような形で現れているかという類型論的・普遍論的問題が、次の焦点となってくるのである。

2. アイヌ語における自動性・他動性の問題

2. 1 自動・他動のカテゴリー化に関する議論

ここで翻って、アイヌ語について自動性・他動性の問題がどのように論議されてきたかを見ることにしよう。

アイヌ語が日本語、朝鮮語、中国語、あるいは満州語、ウィルタ語といった周辺の諸言語と、その動詞の形態統語論的な特質において際立っているのは、自他の区別が文法的に極めて明確な形で規定できるということにある。

アイヌ語における自動・他動の文法的な指標としては、おもにふたつある。ひとつは人称接辞のうちの一人称複数形と四人称の接辞が接頭するか接尾するかということで、自動詞につき場合は接尾辞であり、他動詞につき場合は接頭辞になるということである。

もうひとつは、動詞の要求する名詞項と、付加要素としての名詞項が、後置詞の有無によって明確に認定できるということである。すなわち、動詞の要求する名詞項は必ず後置詞を伴わないいわば「裸の名詞句」で示されるのであり、それが最大限一つであれば自動詞、二つ以上であれば他動詞と判定できる。このふたつの指標は完全に一致すると考えられており（つまり、たとえば、ふたつ以上の裸の名詞句をとりながら、一人称複数形が接尾辞で表されるというような動詞は存在しないということ）、その意味で、文法的な自動・他動というのは、まず一義的に決まるものと考えられている。

人称接辞の違いについては、日本語においてはそもそも対応するものがないので比較にならないが、後者の後置詞の有無によって動詞の必須名詞項が判定できるという点は、日本語（や、おそらく朝鮮語やアルタイ諸語などとも）と、際立った対照をなす点である。前述のように、日本語の統語的な自動・他動の判定の問題は、その多くが後置詞「を」をめぐる議論であったわけだからである。

もうひとつ見のがしてならないのは、形態論的な問題である。アイヌ語は日本語同様、自動詞と他動詞が形

態の上からある程度区別できないではないものの、それだけですべての動詞を自動か他動か判定できるわけではない。しかし、より重要なのは、語源を異にする同音異義語は別にして、同じ形態を持つ動詞が同時に自動詞とも他動詞とも考えられるというケースは、アイヌ語においてはほとんどないということである。かろうじて例外になりそうなものとして、知里（1942）は、次の2語を指摘している（p.487）。

完用詞【中川註：ここでいう自動詞】にも不完用詞【中川註：ここでいう他動詞】にも用ひられる用詞が極めて稀にある。例へば *roski* がそれであって、*as* 「立つ」及び *asi* 「立てる」の複数形に相当する。*as-an* 「我・立つ」>*roski-an* 「(我等・立つ)」。*an-asi* 「我・立てる」>*an-roski* 「我等・立てる」。*kari* も普通単独では「廻る」といふ意味の完用詞であるが、次の合成語の中では不完用詞の意味に用ひられている。*si-kari* 「自分を廻す」即ち「廻る」。

しかし、むしろアイヌ語動詞の語彙体系の中においてもっと問題になりそうなものは、*o* という動詞である。この動詞は、たとえば知里（1956）では、次のようにいろいろな意味を持つものとして記述されている。

- お（お一）（不完）① *oma* の複数。（二つ以上）そこにある；（二つ以上）そこに生じる。（中略）
- ② 古くは、「群在する」「こちゃこちゃある」「うようよいる」の意だったらしい。（中略）
- ③ 群在するような印象を与えるものについて用いられる。（中略）
- ④ 入れる。
- ⑤ 乗る。（後略）

知里はこれらをひとつの動詞と考えていたようであるが、柳下（未公刊）は、千歳方言におけるこの *o* について分析し、次のように整理した（p.51）。

- ① [状態をあらわすとき]（場所目的語動詞）2項動詞で *oma* の複数形として用いられる。
- ② [動作・作用をあらわすとき]（場所目的語動詞）3項動詞で「入れる」という意味をあらわす。
- ③ [動作・作用をあらわすとき] 2項動詞で「乗る」あるいは「実がなる」という意味をあらわす。

場所目的語動詞については後述するが、この②の *o* は、接辞をまったくつけない基本形において三つの名詞句を要求する唯一の動詞ということになり、その点でもアイヌ語動詞の語彙構造全体の中で特異な位置を占める。また①と②の *o* を語源的に関連するものと見ると、同じ語形で二種の項構造を持つことになり、アイヌ語としては *roski* と同じく、極めて例外的な存在だといえる。

この点において際立った対照を見せるのが英語である。英語の動詞は、同じ形態を持ちながら、同時に自動詞でも他動詞でもあるという場合が非常に多い。前述の角田（1991）で挙げられている *open*、*drink* などの例もそのひとつである。

日本語は英語に比べれば、そういった動詞の割合は少ない。例としては「ひらく」(窓がひらいた、窓をひらいた)、「とじる」(ドアがとじた、ドアをとじた)が代表的なものである。ただし、漢字熟語+「する」という形で構成される、漢語サ変動詞を加えると、その数はずっと多くなる。たとえば、「分解する」(タンパク質が分解した、機械を分解した)、「開始する」(試合が開始した、討論を開始した)、など。

また、通常は自動詞とは考えられていないが、実際の用法では自動詞的に用いられている動詞もある。たとえば、前述の角田(1991)で drink の自動詞的用法として挙げられていた、John drinks before meals.だが、その日本語訳の「ジョンは食前に飲む」という文も、「何を」というのを補う必要はなく、いわば「酒を飲む」という意味の自動詞として使われていると言ってよい。

一方、アイヌ語ではこのような文脈で目的語を明示せずに他動詞の ku「～を飲む」を使うことは不可能であり、John ipe etoko ta iku. のように、自動詞の iku「(酒を)飲む」を用いなければならない。このような点は他の動詞についても同じであり、日本語でははっきり自動・他動の違いが意識されないような文脈でも、アイヌ語では異なる形態を持った自動詞・他動詞の対を使い分ける。

たとえば、次のような文では自動詞の inkar「見る」と他動詞の nukar「～を見る」が使い分けられている。

nimu=an yak pirka sekor iki sinne noyne herikasi inkar, asinuma ka i=nukar hi kusu

(K8303243.UP: 木村きみ氏 uepeker より)

「木に登りなさいと言うかのように(犬が)上の方を見、私をも見たので」

この inkar と nukar を入れ替えることはできない。なぜなら、i=nukar「私を見た」という場合は、「私」というのは具体的な対象物なので、他動詞の nukar が用いられ、「私」は目的格人称接辞 i=として表現されているのであるが、herikasi inkar「上の方を見た」という場合、「上の方」というのは対象物ではなく方向であり、herikasi という副詞によって表されている。つまり対象物が特定されていないわけだが、その場合アイヌ語では他動詞を用いることができない。したがって、この場合は自動詞の inkar を使わざるをえないわけである。

以上のような点から、アイヌ語は日本語と比較して、統語的な指標による自動・他動の区別が非常に異論の少ない形で行える言語であり、かつ英語などに比べ、形態論的な自動他動の区別もはっきりした言語であるということが了解されると思う。したがって、これまでの研究者の議論でも、個々の動詞を自動詞か他動詞か判別するという事は、採録例の少なさなどの技術的な問題を除いては、大きな問題にはならなかった。

アイヌ語において、どのような語をひとつのカテゴリーとして認めるかということについて議論があったとすれば、そのひとつは形容詞と動詞の区別に関することである。金田一京助は金田一(1931)において動詞と区別して形容詞というカテゴリーを立て、晩年に至るまで一貫してその立場をとった。一方、知里真志保は知里・金田一(1936)では、金田一京助を踏襲して形容詞というカテゴリーを立てているが、知里(1942)では一転してその区別を無用として、用詞というカテゴリーを立てて両者をそこに含めた。その理由を知里は7項目にわたって列挙しているが、それを要約すれば、アイヌ語のいわゆる「形容詞」は、意味的にも形態論的にも統語論的にも、自動詞(知里:1942の用語で言えば完用詞)と、ほとんど区別がないということである。

ただし、連用詞的用法 (pirka inu! 「よく聴け」) という用法に関しては、「形容詞は例えばドイツ語などの如くそのままの形で連用的修飾語となり得るのに対し、動詞は二三の場合を除いては必ず接尾辞をとってか、或は助詞と共にでなければ連用的修飾語となり得ない。これが動詞と形容詞との間に見出される唯一の相違点である。併し乍ら、形容詞がそのままの形で連用的修飾語に用ひられるのは主として雅語的な言ひ廻しに於てであって、口語に於ては動詞と同様接尾辞をとったり助詞と共に連語をつくったりして述語を修飾するのが普通である」(p.483) と、述べている。

この、単独で連用修飾語になるかどうかという点は、文体差ばかりではなく個人差もあるようであり、また、いわゆる「形容詞」であっても、語によってそのように用いられやすいものと、用いられにくいものがあるようである。この点はまだ詳細に追求されたことのない問題であり、今後の研究の必要とされる部分である。また、「口語に於ては動詞と同様接尾辞をとったり助詞と共に連語をつくったりして述語を修飾する」と、知里は述べているが、この接尾辞や助詞においても、いわゆる「動詞」と「形容詞」との間には違いがあることがわかっており、それがその語のアスペクト素性と関係していることも明らかである。中川 (1981) では、いわゆる「形容詞」と同じアスペクト素性を持つ動詞を「状態性動詞」と呼んでいる。

用詞という用語自体はその後の研究者によっては採用されなかったが、知里 (1942) 以降、一般に形容詞というカテゴリーを立てず、それに当たるものを自動詞の中に含めて考えるのが普通になっている。

動詞のカテゴリーに関するでもうひとつ問題になるのは、知里・金田一 (1936) で「第三類動詞」、知里 (1942) で「第三種の用詞」、田村すず子 (1988) で「連他動詞」、中川 (1995) で「連動詞」と呼んでいるものについてである。これは、paroyki, paro oyki「～を養う」(par,-o「口」、oyki「～にする」)、kaopiwiki, kasi opiwiki「～を救う (ka, -si「～の上」、opiwiki「?」) などのように、他動詞とその目的語が、意味的にはそれぞれの要素に分解できないような一体性を見せながら、統語論的には一語のようにも二語のようにも振舞うものであるが、これについては、佐藤 (2001) が抱合という現象との関連から詳述しているので、そちらを参照されたい。

もうひとつ他動詞のサブカテゴリーということで挙げておきたいのは、場所目的語動詞と呼ばれるものである。アイヌ語においては、場所と物とを、意味的にはなく文法的に峻別するが、他動詞の一部には、目的語 (のひとつ) として、この文法的に〈場所〉を表す名詞句を要求するものがある。例えば、omare「～を～〈場所〉に入れる」という動詞は場所目的語動詞であり、noya ham sito MOCI or a=omare「よもぎの葉をもちに入れる」(N9206012.FN: 白沢ナベ氏会話より) のように、入れる場所 (この例の場合は sito MOCI「もち」) に〈場所〉を要求するので、sito MOCI はそのままでは目的語の位置に立てず、or「～のところ、～の中」という位置名詞を必要とする。この文を noya ham sito MOCI a=omare のように言うことはできない。

一方、kohemesu「～に登る」のような動詞は場所目的語動詞ではないため、sirpeker wakusu ne nupuri a=kohemesu「夜が明けたのでその山に登った」(N8710302.UP: 白沢ナベ氏 uepeker より) のように、(意味的には場所であるが) 〈場所〉ではない名詞である nupuri を目的語にとることができる。

この場所目的語動詞については、中川 (1984) で若干触れているが、詳細な研究はまだなされていないようである。

2. 2 普遍的・類型論的研究との連動

さて、日本語の場合も80年代の終わりから、1. 3で述べたような普遍的・類型論的研究とつながるような、形と意味の相関を視野に入れた研究が進められるようになってきたが、アイヌ語においてそういった研究を積極的に押し進めたのは、佐藤知己である。

佐藤(1992a)は、早津の提案する有対・無対という日本語における区分を受けて、それをアイヌ語千歳方言に応用して具体的に検証したものである。その結果を佐藤は次のようにまとめている(p.24)。

早津(1987:85-86)は、[4]に属する動詞について、「物の属性や物理的特質の一つ、たとえば形・大きさ・長さ・温度・湿度・品質・数量・強度・向きなどが変化する事象を表す自動詞がある。これらの動詞には、無対自動詞が少なく有対自動詞が多い」、また、「物の移動すなわち物の存在場所が変化する事象を表す自動詞がある。これらはほとんどが有対自動詞である」と述べているが、これらの特性が上にあげたアイヌ語の有対動詞に極めてよく当てはまることは、一見して明らかのように思われる。

この有対・無対という概念は、おそらくニヴフ語や朝鮮語などの日本語・アイヌ語をとりまく諸言語にも適用できると推測され、その類型地理論的な含みからも、また形態と意味とが普遍的・類型論的に連動している例としても、極めて興味深い問題を提起しているといえる。

佐藤はまた同じ年に発表された佐藤(1992b)において、アイヌ語における抱合の問題を扱っており、「他動詞主語(極めてまれ)、自動詞主語、目的語の抱合がある」(p.196)という重要な指摘を行っている。特に他動詞の主語抱合に関する例として、koy-yanke「波が～を上げる」、nis-reyere「雲が～を静かに運ぶ」の2語を挙げているが、これらは、意味上の(あるいは抱合前の)主語が他動詞に抱合された結果、自動詞となり、意味上の目的語が、文法上その自動詞の主語として扱われるようになるという、興味深い例である。

この指摘が重要であるのは、1. 3で述べた非対格・非能格という自動詞の区別に関する点で、影山(1993)は日本語の名詞-動詞型の複合語を分析している個所で次のようにまとめている(p.198)。

(36)の項構造から、述語と項で構成される二次複合語において動詞要素と複合するのは内項であるという一般化が得られる。この制約は日本語だけに特有なものではなく、おそらく世界の諸言語にも適用する普遍的な性格を持つものと推測される。この制約によって、外項である他動詞と非能格自動詞の主語は原理的に排除されることになる。

佐藤の指摘する他動詞主語の抱合の例は、その存在を重視すれば影山の説に対する反例ということになるし、「極めてまれ」という点を重視すれば、影山説を強化するものと見なすことができる。その点で、このような例がアイヌ語においてどのような条件下で可能なのかということの検証は、理論的に重要な問題となってくると思われる。

なお、佐藤は *koy-yanke* という語について、*koy ey-yanke* 「波が私を打ち上げる」という文を話者から確認しているにも関わらず、なおも *koy* という形式の自立性について疑念なしとしないという見解を表明しているが (p.201)、ほぼ同じような状況を表す語例として、大塚・中川 (1990) に *wakka-momte=as* 「私は水に流されて」 (p.226) という例が見られる (*wakka* 「水」*momte* 「～を流す」=*as* 一人称主格)。これは旭川方言であり、*wakka* を自立語と認めることに全く問題はないので、アイヌ語一般に他動詞が自立的な主語を抱合する現象があるという推測は可能である。ただ、*koy-yanke* と *wakka-momte* が、あまりにも意味的に近い語であるということが、むしろ問題の焦点となるであろう。

非対格・非能格との関係でもうひとつ興味深いのは、自動詞主語の抱合の問題である。佐藤は *teke-pase* 「(年をとって) 手がなえる」(*teke* 「手」*pase* 「重い」) という例を挙げ、*tek-sinire* 「手を休める」という語と対比させて、「アイヌ語において、自動詞では可能な所属形の抱合が、他動詞では見られないことがわかる」(p.198) としている。では、逆に、自動詞では概念形主語の抱合が見られるのであろうか？ 答えはイエスでもあり、ノーでもある。

この点については、田村すず子 (1973) が先駆的な研究を行っている。そこでは、沙流方言の合成動詞の例が、構成要素別に並べられており、そこで「完全動詞」という用語が (おそらく初めて) 用いられている。完全動詞というのは、自動詞が主語的要素を抱合した結果、名詞項をひとつも要求しなくなった動詞であるが、田村はここで、*me* 「寒さ」を主語要素とする *me-an* 「寒い」と、*sir-pirka* 「天気が良い」、*sir-sesek* 「暑い」などの、*sir* を主語要素とする動詞を、完全動詞の例として挙げている。この *me* と *sir* について田村は、「*me* は単独では用いられないが、合成語の要素としてはよく出てくる」「*sir* は、そのままでは独立の名詞としては用いられないが、語源的にこれの所属形であることの疑いない *siri* は独立的に用いられ、漠然とあたりの様子、目に見える有様を表す」(p.74) と述べている。つまり、*me* と *sir* は自立的な名詞としては見なされていない。

佐藤 (1992b) は、抱合の概念を規定するのに、Sapir (1911) の定義に基づくとしており、そのひとつとして「動詞につく接辞は、たとえそれが名詞 (代名詞を含む) 的意味を持つものであっても、独立の名詞または名詞語幹と語源的に無関係であれば抱合の事例とは言えない」という条項を挙げている。*me* はともかく、*sir* を「独立の名詞と語源的に関係あり」と見なせば、これは概念形名詞の唯一の主語抱合の例ということになるし、*sir* が自立語ではないということでこれを除外するならば、自動詞は概念形主語の抱合を行わないということになる。

柴谷 (1992) は、この他に *sinnam-an* 「寒い」という樺太方言の例と、*kunneiwa-an* 「朝になる」という例を、自動詞の主語抱合の例として挙げているが (p.205)、*sinnam* も *kunneiwa* も語源的にはそれぞれ動詞 (完全動詞)、副詞 (自動詞+形式名詞+後置詞) であり、名詞の抱合と見るのは不都合であろう。

一方、自動詞が所属形名詞を主語として取った場合には、結果は自動詞となる。これは、所属形名詞自体がそれが所属する先の名詞項をひとつ要求するからであり、主語の位置をその名詞が占領しても、出来上がった動詞の要求する項数自体は変化しないためである。

田村 (1973) は、そのような動詞の例として、*kera-an* 「おいしい」(*kera* 「～の味」、*an* 「ある」)、*kewe-ri* 「丈が高い」(*kewe* 「～の骨・体」、*ri* 「高い」)、*paro-askay* 「歌がうまい」(*paro* 「～の口」、*askay* 「うまい」) など

の動詞を挙げている。

上記からの帰結として、自動詞に主語が抱合する場合、その主語は何かの一部を成しているという意味的な条件が必要だということになる。これは、地名などを対象に合成名詞の構造を考察した切替（1984）の結論とも合致する。

切替（1984）は合成名詞中に、修飾構造と擬似修飾構造という二種の構造の区別を与えた上で、yuk-san-nay「鹿がでてくる沢」のような、主語－自動詞－二次的構成要素のような構造がなぜあり得ないかを分析した。その上で、一見それと似たような構造のものとして、次のような構造を持つ地名の存在を認めている（pp.115-116）

- a. 「主語（所属形、部分を表す）・自動詞・二次的構成要素（全体）」 putu wen nay「～の川口（が）・悪い・川」
- b. 「主語（非所属形）、部分となる・自動詞・二次的構成要素（全体）」 wakka hure pet「水（が）・赤い・川」
- c. 「主語（所属形、部分を表す）・自動詞」 nuci tanne「～の深瀬（が）・長く続いている」
- d. 「主語（非所属形）、部分となる・自動詞」 suma perke「石（が）・裂ける」

ここで重要なのは、これらの語形が認められる条件が、前述の主語＋自動詞＝自動詞の場合と同じように、これらの合成名詞の主語にあたる名詞が、常に何らかの一部としてとらえられることだということである。

さらにいえば、切替は putu wen nay と wakka hure pet を主語成分が所属形名詞か概念形名詞かで区別しており、その理由として「wakka は所属形欠如の名詞である」（p.115）と述べているが、一般に所属形がないと思われている名詞でも、意味的あるいは文法的な条件が整えば所属形をとることがあり、wakka や suma が絶対的に所属形をとらないとは言えない。また、両者とも概念形が母音終わりの語であるため、形の上から概念形か所属形を区別することができない。したがって、b および d も所属形名詞である可能性があり、上記の四つの区分は、合成名詞の主要部にあたる部分の違いだけということで二つに還元できるかもしれない。

この主語＋自動詞型の合成（抱合）における所属形という制約が、一般言語学的に興味深いものであるという理由は、日本語においても同じ現象が見られるからである。

影山（1993）は、名詞－動詞複合語について論じている個所で、自動詞の主語でそうした複合語に現れるのは、「非対格動詞の場合だけである」とした上で、その例を挙げているが、その中から和語動詞だけを取り出してみると、次のようになる（p.196）。

波立つ、泡立つ、色あせる、色づく、苔むす、息詰まる、目覚める、色気づく

これらの動詞は、それぞれ「波が立つ」、「泡が立つ」、「色があせる」といった文の主語が抱合されたものと考えられるのだが、それにも関わらず、その複合動詞自体が「海が波立つ」、「石鹸が泡立つ」、「着物が色あせ

る」のように、さらに主語をとることができる。これらの主語と、複合語内部の主語要素との関係は、それぞれ「海の波」「石鹸の泡」「着物の色」のように、後者が前者の部分をなすというふうに一般化できる。ということになれば、主語と自動詞の複合には、アイヌ語にも日本語にも同じ意味制約が働いており、アイヌ語ではたまたまそれを表す所属形という文法形式があるために、その形式によって実現しているということが言えることになる。そしてそれは偶然の一致ではなく、もっと広く普遍的・類型論的にとらえられる現象である可能性が考えられるのである。

影山自身は今行ったような意味制約については触れておらず、上記の日本語の例は動詞が非対格自動詞に限ることを論じようとして挙げられたものである。そこで、アイヌ語の方でもこの点について見てみると、田村(1973)で挙げられている例としては、an「ある」、ram「低い」、ri「高い」、pirka「良い」、askay「できる」、wen「悪い」であり、切替(1984)が前述の構造の記述のところで挙げている例としては、wen「悪い」、hure「赤い」、tanne「長い」、perke「裂ける」となっている。

これらのアイヌ語動詞の大半が、いわゆる「形容詞」、筆者のいう状態性動詞であることは、すぐ見て取れるであろう。1. 3で挙げた Perlmutter & Postal (1984)の分類に従えば、このような「形容詞ないしそれに相当する状態動詞」は、非対格自動詞のひとつに数えられているものである。また、残る perke「裂ける」は、日本語でもアイヌ語でも有対自動詞に相当し、典型的な非対格自動詞と考えらるものである。したがって、影山が前述のように「世界の諸言語にも適用する普遍的な性格」と記した制約は、アイヌ語においてもまさしく適用されていると考えられるのであり、こうした現象の記述がアイヌ語の構造記述だけに留まるものではなく、一般言語学的な理論的な研究に寄与するものであることを、明確に示しているのである。

現代における個別言語の記述的研究は、言語の普遍性・類型性の問題と切り離して行うことはできなくなってきたおり、また、そうした問題との関連を意識しつつ行うことは、その言語の記述を深めるためにも有用なことであると考えられる。このような自動性・他動性というような古くからの歴史を持つテーマであっても、新しい視点が生まれれば、新しい記述的研究の必要性が生じ、新しい事実が発見されてくるのであり、言語学者が、アイヌ語のような記述的研究がすでに終わってしまっていると考えられているかもしれない言語に対して、行わなければならない研究課題はまだ膨大に残されているのである。

参照文献

- 大塚一美編訳・中川裕校訂 (1990) 『キナラブック口伝 アイヌ民話全集』 1 北海道出版企画センター
- 奥津敬一郎 (1967) 自動化・他動化および両極化転形—自他動詞の対応—『国語学』 70 : 須賀・早津編 (1995) に収録 : 頁数は須賀・早津編 (1995) による。
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- Kikusawa, Ritsuko & Sasaki, Kan (2000) *Modern Approaches to Transitivity*, くろしお出版
- 切替英雄 (1984) アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞、『言語研究』 86, pp.105-121
- 金田一京助 (1931) ユーカラ語法摘要『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』 東洋文庫
- 久野・柴谷方良編 (1989) 『日本語学の新展開』 くろしお出版
- 佐藤知己 (1992a) アイヌ語の自他の対応を有する動詞について、『アイヌ文化』 17, アイヌ無形文化伝承保存会, pp.14-25
- (1992b) 「抱合」からみた北方の諸言語、宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』 三省堂, pp.191-201
- (2001) アイヌ語千歳方言の「第三類の動詞」の構造と機能『北海道立アイヌ文化研究センター研究紀要』 7
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan : Part I*, Cambridge Univ. Press
- 柴谷方良 (1992) アイヌ語の抱合と語形成理論、宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』 三省堂, pp.203-222
- 須賀一好・早津恵美子編 (1995) 『動詞の自他』 ひつじ書房
- 田村すゞ子 (1973) アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造、『アジア・アフリカ文法研究』 2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.73-94
- (1988) アイヌ語『言語学大辞典』 第1巻 三省堂 : (1997) 『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』 に収録
- 知里真志保 (1942) 『アイヌ語法研究』 : (1973) 『知里真志保著作集』 第3巻平凡社に収録 : 頁数は『著作集』による。
- (1956) 『地名アイヌ語小辞典』 楡書房 ; (1973) 『知里真志保著作集』 第3巻平凡社に収録 : (1974) 北海道出版企画センター 再刊。頁数は北海道出版企画センター版による。
- 知里真志保・金田一京助 (1936) 『アイヌ語法概説』 岩波書店 : (1974) 『知里真志保著作集』 第3巻に収録 : 頁数は『著作集』による。
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版
- 中川裕 (1981) アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞『言語学演習 '81』 東京大学文学部言語学研究室, pp.131-141
- (1984) アイヌ語の名詞と場所表現『東京大学言語学論集 '84』 東京大学文学部言語学研究室, pp.149-160
- 仁田義雄編 (1991) 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版

- 野村剛史 (1982) 自動・他動・受身動詞について『日本語・日本文化』11: 須賀・早津編 (1995) に収録: 頁数は須賀・早津編 (1995) による。
- 早津恵美子 (1989) 有対他動詞と無対他動詞の違いについて『言語研究』95
- Pardeshi, Prashant (2000) Transitivity and the Causative in Marathi, in Kikusawa & Sasaki (2000), pp.115-139
- Perlmutter, David & Paul Postal (1984) The 1-Advancement Exclusiveness Law, in D.Perlmutter & C. Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar 2*, pp.81-125, Univ. of Chicago Press
- Hopper, Paul J., & Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse, *Language* 56
- 松下大三郎 (1923-24) 動詞の自他被使動の研究 (一) ~ (完)『国学院雑誌』29-12, 30-1.2: 須賀・早津編 (1995) に収録。
- 柳下み咲 (未公刊) アイヌ語動詞の意味分析、昭和 63 年度千葉大学文学部卒業論文
- ヤコブセン、ウェスリー (1989) 「他動性とプロトタイプ論」: 久野・柴谷編 (1989) pp.213-248